

## はじめに

時代が変わるときというのは、そこに特定の個人の桁外れの情熱があることが多い——と、作家の堺屋太一さんが話してくださったことがある。長年、歴史研究をするなかで、最終的に思うところは、そのようなことであるという。

歴史はまさに人がつくる。それは時代の先頭を走る傑出した個人であることもあれば、ローカルな持ち場で、情熱の炎を静かに燃やし続ける個人であることもある。その意味では全員が歴史の主人公となり得るのだ。

私自身のことを考えたとき、ローカルな現場を原点に、紛れもなく情熱を傾けて生きてきた。「女性で政治学？」と不思議がられた時代に国際政治学を情熱をもって志し、学者として多くのことを発信し続け

てきたつもりである。

女性が学び続けることや職業をもつことがなかなか難しかった時代に生きて、時代がこうだから時代が変わるまで待とうという発想ではなく、むしろ時代に先駆けて、自分の持ち場が新しい時代の最初の息吹や兆しとなるようにと気迫をもって進んでいく。それは教育者だったころも、政治家となったいまも変わらない。米国留学から戻って教壇に立ったとき、日本には大学改革こそ必要と感じ、まずは自分の教室から日本一の国際政治学の講義をすることに腐心した。少子化大臣となったときは、全国の自治体の首長や実務者と話し合いを行い、新しい社会政策を編み出すことに没頭した。自分のローカルな持ち場において、時代に先駆けた努力を示すことなくして、大きな議論をしても空疎であろう。

人にはみな、その人らしさや持ち味がある。職業が変わっても、新しい課題に取り組むことになっても、物事への取り組み方、人間についての視点、静かな情熱や勇気等々、その人らしさがそこはかとなく

感じられるものである。簡単に「お人柄」と言ってしまうこともあるかもしれないが、その人の生い立ちや人生の歩みのなかで、時にはフーガのモチーフのようにひそやかに、時には主旋律として力強く流れ貫くものがある。それを自己発見し、肯定し発展させてみてはどうだろう。「くにcism」は私の場合の例であって、それぞれの人にそのようなものがあるかもしれない。自分の持ち味など取るに足らない、語る価値がない、などと思わずに大事にしていくこと。それは民主主義に内在する「すべての人は大切」という考えにもつながることではないかと感じている。

いま、私は知の楽園ともいえる学者の世界から、より実践的な政治の世界へと分け入っている。時代の変化や発展をいち早く察知し、よりよい方向に導く役割が政治学という学問分野にはある。そんな思いに突き動かされて、新たな情熱を燃やしている。

政治家として多くの人と出会い語り合うなかで、私は自分を丸ごと信頼してもらうためには、まだ十分に語り尽くせていないもどかしさ

を感じてきた。そんな思いから、これまで歩んできた道を振り返り、猪口邦子の持ち味を知ってもらいたい、と本書「くにこism」を語り起こすことを思い立った。ここには、論文や学術書とは違い、人間、猪口邦子がいるはず。本書に注いだ情熱にはまさに邦子らしさがあると感じているが、いかがだろうか。

飯田橋の編集室にて

猪口 邦子